

— 江戸民具街道からの便り、和ろうそくをたずねて —



皆さんは和ろうそくのご存じでしょうか。現在 100 円ショップ等で安価に購入できるろうそくは石油から作られたパラフィン系のろうそく（上記写真右）が主流ですが、その昔に使用された和ろうそく（上記写真左）はウルシ蠟やハゼ蠟で作られていました。この度和ろうそくがどのように作られているのかを自分の目で確かめるべく、和ろうそく作りの見学に行ってきましたのでご紹介させていただきます。

今回訪問したのは琵琶湖湖畔の近江今津にある和ろうそく屋大興さんになります。3代目の蠟燭職人である大西明弘さんが代々受け継がれたハゼ蠟のみを使用した和ろうそく作りをしています。そして大西さんのご家族が日本の伝統を守り続けていました。

・和ろうそく作りは火が灯る部分である芯作りから始まります。今年 89 歳になるみよ御婆ちゃんが縁側で芯巻の作業をしていました。作業用の棒の周りに和紙を被せてその上に灯芯草を巻き付けていくのですが、少し力を加えると簡単に折れてしまうもろい灯芯草を手際よく巻き付けていきます。昔は灯芯草が切れにくくなるように風呂釜の蓋の上で一晩おいてから作業したこともあるとのことでした。最後に巻き付けた灯芯草がほぐれないように真綿で止めて出来上がりです。みよ御婆ちゃんはお嫁入りしてから既に他界されたおじいさんの作業をみようみまねで習得し、何十年もの間和ろうそく用の芯巻作業をしてきたそうです。89 歳になった今でも、この作業をしないと落ち着かないとのことでした。



さてここで3代目大西明弘さんと息子さん達によるハゼ蠟を使ったろうそく造りが始ま

ります。ハゼ蠟の主な生産地は九州で、大興ではハゼ蠟を九州の間屋から仕入れています。  
(下記写真左側が下掛け用、右側が化粧掛け用、手前の真ん中は漂白したハゼ蠟の固まりになります。)



- ・前段階で和紙に灯芯草を巻いて作った芯を太さの合った棒にさします。(芯さし)
- ・芯の部分を溶かしたハゼ蠟に突っ込んで引き揚げ、芯と蠟がなじむように乾燥させて固めます。(芯締め)
- ・ハゼ蠟の固まりを熱して溶かし、それを手ですくって芯の部分に掛けながらろうそくの形に仕上げていく作業を生掛けといいます。ハゼ蠟は40度くらいで溶けて液化しますので、溶けた蠟を手で触ってもやけどをすることがないとのことでした。芯を被せた棒を数本手に取り、棒の下側を台の端に載せて右手の平でこするようにして棒をくるくると回転させます。そこに溶けた蠟を左手ですくっては芯の上にかけて、厚みが均一になるように指で均します。塗りつけた蠟が固まるのを待ち、そして再びこの作業を繰り返しながら厚みを付けていきます。  
(下掛け)



- ・ろうそくの一番外側には特に純度の高いハゼ蠟を被せており(上掛け・化粧掛け)、緑がかった美しい和ろうそくに仕上げていきます。
- ・そして最後に棒から外して包丁で先端を削り(芯出し)おしりの部分を平にすれば和ろうそくの出来上がりです。

ハゼ蠟だけを使用した伝統的な和ろうそくを作っている職人さん達が今でも日本各地に残っており、そして大西さんの息子さん達のように古来の技法を継承している若者達が

います。混ぜものを一切しない純粋なハゼ蠟を使った和ろうそくは決して安くはありませんが、今回の見学を通して時には本物の和ろうそくに火を灯して日本人ならではの贅沢な癒しのひと時を過ごしてみたいという思いにかられました。



今回お世話になりました近江手造り和ろうそく大興の大西さんご家族です。  
前列右側 3 代目大西明弘さん、左側みよ御婆ちゃん、後列右側 4 代目の巧さん、真ん中お母さんの智栄子さん、左側次男の央（ひさし）さん

近江手造り和ろうそく大興のホームページ：<http://www.warousokudaiyo.com/>